

文化財 ニュース

13 Autumn 2017

■ 共同企画特別展

《新発見「江戸始図」関連展示》

「松江城と江戸城

—国宝になった城と天下人の城—開催

秋の特別展は、今年2月、新聞各紙で紹介された「江戸始図」を中心に島根県・松江市と共同で、「松江城と江戸城」を開催します。

国宝になった松江城天守と「江戸始図」を含む全国の城下町図である「極秘諸国城図」を紹介します。この絵図の解析によって明らかになる徳川家康の江戸城、さらには戦乱の世から平和の世の到来によって政治の場へと推移する江戸城を紐解きます。

今号では、展示の見どころを紹介します。展示とともに講演会や文化財めぐり、展示解説も行います。

この秋、近世の城をめぐる文化に触れてみませんか。



松江城天守



江戸城富士見櫓

会期：平成29年9月19日(火)
～平成29年11月19日(日)

※10月16日(月)は休館

開館時間：月～金曜 午前10時～午後8時
土曜 午前10時～午後7時
日曜・祝日 午前10時～午後5時

会場：千代田区立日比谷図書文化館
1階特別展示室

入場無料

松江城と江戸城―国宝になった城と天下人の城―

I. 近世の城と城下町 ―徳川家康の目指した国づくり

現代の主要都市は、近世の城下町の流れを汲むものが多いといわれています。このような城下町は、織田信長から豊臣秀吉政権下で実施された兵農分離による諸大名の家臣集住政策の過程で発展しました。関ヶ原の戦いから大坂の陣を経て徳川政権が確立し、元和元年（1615）の一国一城令によって、原則一大名、一居城とされたことにより、城下町への集住化が進みました。

こうして江戸初期に各地の城下町が形成・発展していくことにより、そこでの文化や気質が育まれ、現代に引き継がれていったのです。

ここでは、江戸城と松江城、その城下町を知る上で、各地の城下町絵図を通して、近世城郭と都市プランを紐解きます。



松江四季眺望図（松江歴史館蔵）

II. 国宝になった城・松江城

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いで東軍に参加した堀尾忠氏は、遠江国浜松12万石から出雲・隠岐国24万石に加増されて、父吉晴とともに出雲へ入国します。当初は戦国時代の山城の富田城へ入りますが、出雲国の中心に近く、日本海の海上輸送にも結びつく宍道湖の出入口にあたる亀田山を新たな城地と定め、慶長12年（1607）から城と松江城下町の建設に着手します。

松江城天守は、慶長16年（1611）の墨書銘のある祈祷札が再発見されるとともに、長さ2階分の通し柱による構法など、さほど長大でない部材を使って天守という高層物の建築を可能にした最も早い例であることがわかり、平成27年（2015）7月に国宝に指定されました。

ここでは、近世城郭最盛期を代表する建築物として再評価された松江城天守を中心として城と城下町の実態に迫ります。江戸時代に製作された松江城天守雛形（市指定文化財）や城下町絵図、風景画などで往事の松江城をたどり、堀尾氏と家康の孫にあたる松平直政といった歴代藩主の偉業を通して松江の歴史を示します。



松江城天守雛形（松江市蔵）[松江市指定文化財]



松平直政初陣図（松江歴史館蔵）

III. 新発見「江戸始図」 ―松江に残る諸国の城図

「極秘諸国城図」は、東北から九州に至る各地の城と城下町を描いた74枚からなる絵図群です。この絵図群は、昭和25～30年（1950-55）に行われた松江城天守の解体修理で城に関する資料を収集していた際に市民から松江市に寄贈していただいたものですが、その来歴は明らかになっていません。各図は折り畳まれており、収納された袋には「元禄五年」と見えることから、この絵図群は元禄5年（1692）以前に製作されたと考えられます。

「極秘諸国城図」の中には、平成29年2月に徳川家康築城の江戸城を描いた最古級の絵図であることが判明した「江戸始図」や大坂の陣で構築された真田丸を描いた「大坂 真田丸」、堀尾吉晴が居城とした「遠州浜松城」、松平直政が一時居城とした「信州松本」など、松江城主に関わる城下町絵図も含まれており、これらの絵図を紹介します。



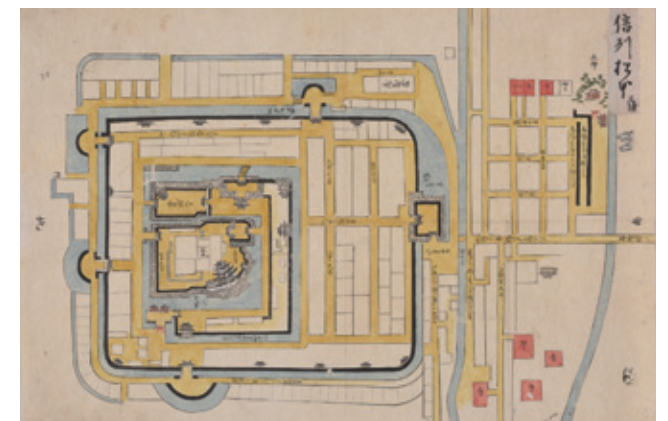
真田軍扇（複製）（原本：松江神社蔵、松江市指定文化財）



大坂真田丸（「極秘諸国城図」松江歴史館蔵）



遠州浜松（「極秘諸国城図」松江歴史館蔵）



信州松本（「極秘諸国城図」松江歴史館蔵）

IV. 天下人の城と城下 ―謎解き「江戸始図」

ここでは、「江戸始図」をもとに、江戸図の歴史と発掘成果によって、江戸時代初期の城と城下の実態を紹介します。

徳川家康の江戸城を描いた絵図は、都立中央図書館に残る「慶長江戸絵図」などが知られていましたが、いずれも重要な本丸の表現は不明瞭で、その構造はよく分かっていませんでした。しかし「江戸始図」では、天守の構造や石垣・土手・堀など本丸の様子が手に取るように分かります。

謎解き「江戸始図」として、この絵図と現存する遺構、発掘成果を照らしあわせて、家康の江戸城が東西の城づくりの技術を取り入れた、防御に優れた本丸であったことを示します。

江戸時代初期の城下町について、今まで千代田

区では、大手町・丸の内・有楽町の遺跡発掘調査を数多く行っています。そのなかで金箔を施した豪華絢爛な武家屋敷、大名の茶道具や器物が使われていたことが徐々に知られるようになってきました。これらの資料を通して、大名屋敷の構造や生活の実態に迫ります。

また、「極秘諸国城図」には「江戸始図」のほか、報道では知られていない、もう一枚の江戸城図があります。江戸時代の中頃と考えられる「今江戸図」です。この二枚の江戸城絵図を通して、江戸時代の江戸図を紹介し、「今江戸図」の謎解きもします。



「江戸始図」（「極秘諸国城図」松江歴史館蔵）

V. 平和の城・江戸城

元和元年(1615)大坂の陣が終結し名実ともに徳川家が権力の座につくと、まず二代秀忠は江戸城本丸の大改築に着手します。元和8年(1622)に本丸北側の堀と馬出を埋め、本丸御殿を拡張して江戸城内堀の堀が石垣に作り替えられ、天守の改築が行われました。

続く三代将軍家光による寛永13年(1636)の工事では、延長14kmにもおよぶ外堀が築かれました。この最終的な工事によって、約半世紀をかけて諸大名を動員した御手伝普請による江戸城「惣構」が完成します。

寛永13年の普請は、百家を超える大名家を動員した史上最大規模の築城工事でした。この工事は、東国と西国の大名に分け、さらに石高の多い大名を組頭として中小の大名を配下に付けた組ごとに行われ、石高に応じて各大名の工事量を割り与えていました。まさに平和の世の到来に際し

て、大名の格付けを行う目的だったのかもしれませんが。ここでは、江戸城築城が城造りだけでなく、政治的な役割、都市開発であったことを紹介します。

平和の世の到来とともに江戸城本丸は、政治の場として象徴的な空間となっていくます。大広間や書院、さらには刃傷沙汰で有名な松之廊下の障壁画を復元しながら、それぞれの部屋の性格や障壁画が果たした役割を紐解きます。

江戸城は明治維新後、皇居に定められ、今も国の特別史跡江戸城跡や史跡江戸城外堀跡・常盤橋門跡が残り、田安門・清水門・外桜田門が国の重要文化財に指定され、文化財として多くの遺構が残っています。将軍徳川家康以降、戦乱の世から平和の時代に至る天下人の城・江戸城を解明します。
(後藤宏樹)



江戸城本丸大広間上段障壁画下絵



江戸城本丸大広間二の間障壁画下絵（一部）

原本：東京国立博物館

新規収蔵資料 今川小路共同建築関係資料

かつて靖国通り沿いにあった“九段下ビル”をご記憶の方はいらっしゃるでしょうか。現在は取り壊され更地になっていますが、かつてここには店舗と住宅が一緒になったレトロなビルがありました。正式名称を「今川小路共同建築」といいます。耐火構造で建設されたこの建物は、関東大震災後の復興が進む大正末に計画され、昭和2年（1927）に竣工しました。

今年6月、区内にお住いの森田千秋さんから今川小路共同建築に関する図面および資料（計12点）が千代田区教育委員会に寄贈されました。資料には立面図や建設会社による説明パンフレットの他、建設時の材料・費用等を示した書類も含まれており、今川小路共同建築について様々なことを伝える貴重な歴史資料といえます。

震災復興の中でこの建物が建設された経緯や、建物についてご紹介します。

◆関東大震災と千代田区の被害

大正12年（1923）9月1日に発生した関東大震災において、現在の千代田区内（麹町区・神田区）は大きな被害を受けました。万世橋駅やニコライ堂、警視庁といった地域のランドマークが被災し、また振動による倒壊だけでなく火災による木造建築の焼失数も膨大な数にのぼりました。

震災後の復興計画では、区画整理の実施や防火帯の設置、公園の整備などが行われ、火災の延焼を防ぐための措置が取られました。また、建物自体の不燃化を目指し、耐火建築の建設が奨励されました。その中で生まれたのが「共同建築」と呼ばれる建物です。

◆共同建築とは何か

震災復興事業の中で、耐火建築の建設は大きな課題とされました。焼失した木造小学校が鉄筋コンクリート造の「復興小学校」として再建されたこともそのあらわれです（千代田区教育委員会は、平成29年に「旧神田区復興小学校建築関係文書」を区の文化財として指定しました）。

震災の翌年には、東京市（当時）内に防火地区が設定され、都市の不燃化計画が進められていきます。しかしながら、当時最新の技術である鉄筋コンクリート造の家屋や店舗を個人が新築するの



今川小路共同建築外観写真（パンフレット「今川小路共同建築二就テ」より）



取り壊される前の今川小路共同建築（九段下ビル） 1964年撮影 千代田区広報広聴課提供



パンフレット「今川小路共同建築二就テ」と「今川小路共同建築設計書」
パンフレットには平面図も示されている。また、設計書には建材等に関する細かい情報が記されている。

は経済的な面からも厳しい状況でした。

そこで、耐火建築を建設しようとする市民に対して融資を行うことを目的として復興建築助成株式会社が設立されました。同社は、東京市・横浜市と民間が共同運営しました。

この会社からの助成で建設された耐火建築のことを「共同建築」といいます。中でもその代表例として知られるのが昭和2年（1927）竣工の今川小路共同建築です。

「今川小路共同建築二就テ」というパンフレットでは、共同建築に関する説明を以下のようにまとめています。

- ① 隣り合っているいくつかの敷地の人々が個々に家を建てる代わり、共同して建設する建物。
- ② 土地と建設費、上下水道やガスの工事費を節約することができ、経済的である。
- ③ 必然的に大きな建物となるので、安定性が増す。
- ④ 複数の建物を並べて建設すると、壁と壁の隙間ができるが、共同建築は一つのつながった建物であるため、空間を有効に使うことができる。
- ⑤ 堂々とした外観を持つ大きな建築となるため、よく目立ち、商売上の広告となる。

このように、共同建築には数多くの利点がありました。代表例として知られる今川小路共同建築を含め、建設された共同建築のほとんどは3～4階建てです。1階部分が店舗、上階は住居または貸室とすることが多かったようです。

◆今川小路共同建築について

復興建築助成株式会社が手掛けた最初の建物が今川小路共同建築です。所在地は東京市神田区今川小路3丁目（現在の千代田区神田神保町3丁目）で、3階建ての鉄筋コンクリート造でした。8名が施主となり、借地だった土地を共同購入してその上に建設されたものです。南省吾が設計を担当、工事は上達合名会社が行いました。

外部正面はコンクリートおよびタイルと煉瓦仕上で、背面はモルタル仕上、室内の造作は木造でした。

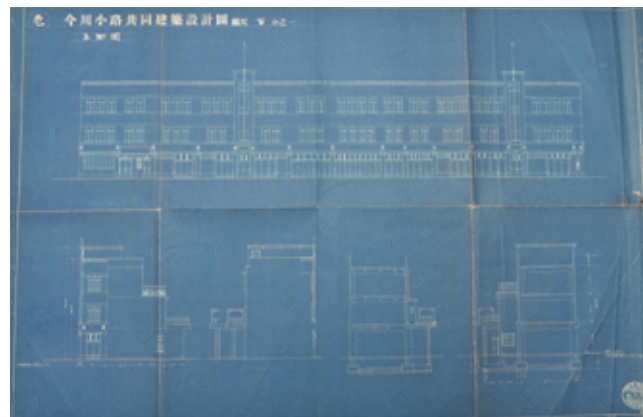
1階の店舗は和洋折衷ですが、2階の住宅部は和風、3階は洋風でした。1階店舗とその上の住居は個別の階段でつながっており、また3階に設けられた貸室部には共有階段で上がるようになっています。

各戸の延坪は約29坪から約56坪まで幅があり、内部構造や入口のデザインは、全体の統一性を崩さない程度で、施主の希望によって違いがあったようです。ある店舗では、床面がモザイクタイルでした。

建設費（防火地区建築補助規制による助成金を除く分）は施主が月賦で助成会社に返済し、また貸室の売り上げはそれぞれの所有者の収入となりました。

建物1階には、酒屋など様々な店舗が入り、また3階の貸室部分にもタイピスト学校などが入居していました。

戦災を乗り越え、戦後も店舗の営業と所有者の居住は続きましたが、老朽化により平成24年（2012）に取り壊されました。（長谷川怜）



今川小路共同建築設計図。寄贈資料には、立面図のほか、配置図、断面図、矩計図、各階の平面図が含まれる。

今川小路共同建築（九段下ビル）基礎情報	
*復興建築助成株式会社・上達合名会社「今川小路共同建築二就テ」（昭和2年8月）、南建築事務所「今川小路共同建築設計書」（大正15年12月）より作成	
建築助成	復興建築助成株式会社
所在地	神田区今川小路3丁目
施主数	8名
設計者	南省吾
施工者	上達合名会社
構造	RC造
階数	3階建（一部4階。ただし塔屋）
高さ	約38尺（塔屋部は約43尺）
総工費	約12万4,500円
総延坪	415.5坪
着手	昭和2年1月
竣工	昭和2年7月（平成24年解体）

参考文献

- 南省吾「共同建築の利益に関する基本説明と其实例」（『工事画報』昭和3年11月号、1928年）
- 栢木ほか、伊藤裕久「復興建築助成株式会社による関東大震災復興期の「共同建築」の計画プロセスと空間構成に関する研究」（『日本建築学会計画系論文集』第603号、2006年）

共同企画特別展開連事業

参加者募集 千代田区民優先、応募者多数の場合は抽選

1. 講座 会場：日比谷図書文化館地下1階 日比谷コンベンションホール
《資料代各 800 円（特製グッズ付き）》 定員 各200名

	演 題	開催日時	講 師	応募締切
①	「江戸時代初期の江戸城と大名屋敷」	10月10日(火) 午後7時から	後藤宏樹 (千代田区教育委員会)	9月30日(土) *消印有効
②	「江戸城本丸御殿の建築」	10月23日(月) 午後7時から	小粥祐子氏 (東京都公文書館)	9月30日(土) *消印有効
③	「松江城天守と雛形」	11月 5 日(日) 午後2時から	山田由香里氏 (長崎総合科学大学教授)	10月15日(日) *消印有効
④	「家康の江戸城 —「江戸始図」の歴史的意義—」	11月12日(日) 午後2時から	千田嘉博氏 (奈良大学教授)	10月15日(日) *消印有効
⑤	〈日比谷カレッジ〉 「江戸の武家地景観 —「江戸図屏風」をよむ—」	11月17日(金) 午後7時から	波多野純氏 (日本工業大学名誉教授)	10月15日(日) *消印有効

2. 展示解説 上記講座開催の1時間前に特別展示室へお集まり下さい。
(全5回)《申し込み不要・無料》

3. 文化財めぐり 《資料代各 800 円（特製グッズ付き）》

	内 容	開催日時	講 師	定 員	集合場所	応募締切
⑥	江戸城登城ウォーク①	11月 3 日(金) 午後1時30分から	後藤宏樹 (千代田区教育委員会)	30名	桜田門付近	10月15日(日) *消印有効
⑦	江戸城登城ウォーク②	11月 4 日(土) 午後1時30分から 終了後、希望者に日比谷図書文化館での 特別展示解説を行います。	相場峻 (千代田区教育委員会)	30名	北桔橋門付近	10月15日(日) *消印有効

*江戸城登城ウォークは、①・②重複しての応募はできません。

申し込み方法

往復はがきに、① 講座名、② 氏名・年齢、③ 住所、④ 電話番号を記載し、
〒100-0012 千代田区日比谷公園1-4 千代田区立日比谷図書文化館文化財事務室
へご送付下さい。*1 講座につき1枚の往復はがきをお送りください。

問合せ

〒100-0012 千代田区日比谷公園1-4
千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務室
電話：03-3502-3348 FAX：03-3502-3361
メール：bunkashinkou@city.chiyoda.lg.jp



都営地下鉄 ●三田線「内幸町駅」徒歩3分
東京メトロ ●千代田線
●日比谷線 「霞ヶ関駅」徒歩5分
●丸ノ内線
駐車場 当施設に駐車場はありません。

開館時間 月～金 午前10:00～午後10:00
土 午前10:00～午後 7:00
日・祝 午前10:00～午後 5:00
文化財事務室 月～金 午前10:00～午後 6:00
※企画展・特別展の観覧時間は異なる場合があります。
休 館 日 毎月第3月曜日
年末年始(12月29日～1月3日)
特別整理期間

文化財ニュース 第13号 (2,000部)
発行日 平成29年9月11日
編集・発行 千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務室
〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4
TEL:03-3502-3348 FAX:03-3502-3361
HP: <http://hibiyal.jp/bunkazai/index.html>
e-mail: bunkashinkou@city.chiyoda.lg.jp
印刷 能登印刷株式会社